

〔論文〕

# 母子関係に関する文献レビュー

—身体接触が及ぼす効果—

小島賢子  
Satoko Kojima

大阪総合保育大学大学院  
児童保育研究科 児童保育専攻

要約：身体接触におけるその意義や効果、母子関係への影響について明確にし、今後の母子関係に向けて支援するための示唆を得ることを目的として、(1) スキンシップ（身体接触）の意義や効果に関するもの(2) 母子関係への影響に関するものを国内の過去10年間における先行研究の概観を行った。結果、スキンシップ（身体接触）の意義や効果について、①対人関係における相互的行為であること②親と子どもの相互に効果があった。その効果は、母親の対児感情を高め、子どもの不安を低下させ、母子相互の身体的コミュニケーションとなっていた。

母子関係への影響について①母親と児の母子相互作用が高まり、母親は安堵感や前向きな気持ちを抱くことができた。児には精神的安定をもたらした。②母親の肯定的な育児意識が、参加したタッチケア教室での体験により高くなった。③幼児期の身体接触の重要性とその効果について個人の要因に左右されることが示唆された。今後の身体接触の研究は母子関係と子どもの発達に視点を置き、子育て支援や親子間の身体接触が課題となる。その際、母親の幼児期の身体接触体験について、十分な検討が必要となる。以上が今後の良好な母子関係の形成に重要となる。

キーワード：触れる、母子関係、身体接触、スキンシップ、発達

## はじめに

子どもの育ちをめぐる現状は、内閣府「平成18年度版」男女共同参画白書によると、育児・家事時間、子どもと接する時間は、母親と父親を比較した場合、父親が減少傾向となっている。父親の子どもと接する時間の減少は子育ての時間の多くを母親が担うこととなり、母親の子育ての負担を大きくしているといえる。また、「平成19年版」国民生活白書では、少子高齢化、核家族化によって別居家族が増加しており、親が子どもと交流する量が同居家族より少ないと報告されている。同書の地域のつながりに対する調査では、近所とのつながりに対する意識が変化してきたことによって、地域における人間関係が希薄化しているとの報告もある。以上から、親子の交流が少なくなる一方で、地域での支援が受けられない環境において、母親が父親の援助もなく、一人で子育てを行っていることが明らかになっている。そのため、子育て支援の重要性が指摘されてきた。

子育て支援に対する施策は、1990年の「1.57ショック」を契機に、政府は、仕事と子育ての両立支援などの子どもを生き育てやすい環境づくりに向けての対策の検討を始めた。「今後の子育て支援のための施策の基本方向に

ついて」(エンゼルプラン)(1994年12月)「重点的に推進すべき少子化対策の具体的実施計画について」(新エンゼルプラン)(1999年)、さらに、「少子化対策大綱に基づく具体的計画」(子ども・子育て応援プラン)(2004年)、そして、「生活と仕事と子育ての調和」(子ども・子育てビジョン)(2010年)へと展開されてきた。平成25年4月より導入された子ども・子育て新支援制度では、子どもを生き育てることに喜びを感じられる社会を目指して、次代の社会を担う子ども一人ひとりの育ちを社会全体で応援する必要性が強調されている。子育てにかかると経済的負担の軽減や安心して子育てができる環境整備のための施策など、総合的な子ども・子育て支援が推進されている。この施策によって、子育ての環境整備ができ、孤立している子育ての現状を改善することが可能となってきた。

しかし、母親側には、子育てに関わる親の子どもとの関係性を構築する知識や技術が核家族化により伝えられていない現状がある。また、利便性を追求する育児という価値観が若い親の世代に広がっているため、伝統的な日本の乳児への密着型の接触から、スキンシップをしない母親の増加へと変化してきている(山口, 2003)。子どもと母親の関係について、アタッチメント理論は「特

定の個人に対して親密な情緒的きずなを結ぶ傾向を人間性の基本的構成要素としてみなし、「きずなは、保護し、安心させ、そして支持してくれる親（または親に代わる人物）との間に結ばれる」（p.153）（John Bowlby, 1988）とする。子どもがどのように発達するかについて、Bowlbyは「両親（または両親に代わる養育者）が子どもをいかに扱うかということに深く影響される」と指摘している（p.157）（John Bowlby, 1988）。また、親と子どもが交流する量や時間が減少し、子どもへの虐待が増加している現状を考えると、親が子どもとどのように関わるのかという、親子での交流や関わり方の質をより良いものにしていく必要がある。心地よい身体接触を含む安全のサイクルを繰り返し経験することで、子どもの心身が健全に発達していくといわれている（初塚, 2010）。そのため、心地よい身体接触について幅広く研究する必要があると考える。

身体接触についての研究は、看護におけるタッチケア、タッチ、タッチングとして行われ、その数は多い（高田ら, 2012）。また、ベビーマッサージの効果に関する研究も多い（飯島, 2015）。しかし、親子の交流や関わり方として、身体接触を取り上げた文献は、くすぐり遊びに関するものであり、数は少ない。

そこで、今回、親子の交流や関わり方としての身体接触に関する文献を収集した。また、親子間では、とくに母親と子どもの関係に着目した。母親は、子どもと親密な情緒的きずなを結ぶ一方、子育ての中心とならざるを得ない。そのため、母親は不安や負担を感じ、育児不安となることによって虐待をする可能性（渡邊, 2011）が考えられ、それが着目をする理由である。

## I 研究目的

身体接触（スキンシップ）の意義や効果、母子関係への影響について明確にし、今後のよりよき母子関係構築に向けて支援するための示唆を得ることを目的とする。

## II 研究方法

### 1 データの収集方法

文献検索は、国内発行の医学・看護学等及びその関連領域の雑誌論文を収録した医学文献データ「医学中央雑誌」と、国立情報学研究所学協会が発行された学術雑誌と大学等で発行された研究紀要の両方を検索できる「CiNii（国立情報研究所論文情報ナビゲーター）」の検索媒体を使用した。文献は原著論文・研究報告を対象とした。期間については、1988年～2005年では、看護師の行うタッ

チの研究が数多く存在したが、「身体接触と愛着形成との関連」や「身体接触と育児」に関する研究が皆無であったため、対象期間は2005年～2015年の10年間とした。キーワードは「スキンシップ」「身体接触」「抱っこ」と「親」「母子間」「幼児」をそれぞれにかけ合わせて検索した。本研究の目的にあった文献の選択は（1）身体接触（スキンシップ）の意義や効果に関するもの（2）母子関係への影響に関するものとした。検索によって挙げられた題目、キーワード、要約を確認し、対象が父親、補完療法としてのタッチ研究、福祉施設や病院を対象としている研究については、目的を考え除外した。

## 2 対象の文献の概要

対象となる14件の概要を、表1「身体接触における研究一覧」に示した。原著論文が7件、研究・研究報告・論文が7件であった。身体接触における今後の展望と効果についての文献は6件、身体接触が、子どものイメージに与える影響や愛着・育児不安・母子相互作用に及ぼす影響の文献は5件、育児意識に与える影響の文献は1件、また、子ども時代の身体接触と青年期の愛着や対人関係との関連性について明らかにされていた文献は2件であった。対象者数範囲は、7～570名であった。研究方法は、質問紙による調査研究のみの文献は2件、尺度のみを用いた文献は3件、尺度と実験、尺度と質問紙による調査研究は、3件であった。観察とビデオ撮影方法を用いた文献は3件、質的研究の文献は2件、文献レビューは1件であった。

## 3 研究結果

### 1) 身体接触の意義と効果

#### ① 対人関係における相互的行為

川名（2008）の研究は、身体接触が母親と子ども双方の親密化を促進するうえで大きな役割を果たしており、「ふれあい」は、「親密な対人関係」や「こころの触れ合い」を意味していると指摘している。身体接触の実相を調査するため、日常の対人関係において、相手の身体のどの部分に触れたり、触れられたりするのかわかると答えを求め、身体接触率が相手との対人的親密度と密接に関連する結果を得ている。また、身体接触の相手と接触部位は対応していた。具体的には、知らない人が接触できるのは肩と背中であった。身体接触を許される部位は相手のタイプ（父親・母親・同性友人・異性友人・恋人）によって厳密に弁別されていた。性によっても対人アプローチの違いが認められた。身体接触が対人関係の親密度やタイプの違いによって影響されることが明らかにされた。また、「自己開示」に関する項目の因子分析を行った結果、

表1 身体接触における研究一覧

番号	表題	著者	掲載誌	論文種類 (頁)	掲載年	方法	対象	研究内容
1	母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達	根ヶ山光一・山口創	小児保健研究	研究 (10)	2005	横断研究縦断 研究自然観察 法	母子	くすぐり 遊び
2	母子間スキンシップが母児相互に及ぼす生理・心理的影響	坂口けさみ・ 大平雅美・ 市川元基他	母性衛生	原著 (7)	2006	対児感情尺度 心拍数	母子	抱っこ 話しかける
3	「抱きしめる」という効果	竹澤博美・ 相守節子・ 牧野雅美他	新田塚医療福祉 センター雑誌	原著 (2)	2007	日本版 CBCL 検査	園児	抱きしめる
4	新生児期のタッチケアが母親の胎児感情に及ぼす要因	山本正子・ 三巖真砂枝・ 山口創	母性衛生	原著 (6)	2008	対児感情尺度	母親	タッチケア 20分
5	対人関係における身体接触の位置づけ	川名好裕	明治大学心理社 会学研究	原著 (4)	2008	質問紙調査	大学生 男女	触れる
6	「抱きしめる」ことが親のイメージに与える影響に関する研究(1)	今川真治・ 山元隆春・ 財満由美子	広島大学学部・ 附属学校共同研 究機構紀要	研究報告 (9)	2008	質問紙調査 対児感情尺度	父親・ 母親	抱きしめる
7	「抱きしめる」ことが親のイメージに与える影響に関する研究(2)	今川真治・ 山元隆春・ 財満由美子	広島大学学部・ 附属学校共同研 究機構紀要	研究報告 (6)	2009	対児感情尺度	父親・ 母親	抱きしめる
8	身体接触の臨床心理学的効果と青年期の愛着スタイルとの関連	相越麻里	岩手大学大学院 人文社会科学研 究科紀要	研究報告 (18)	2009	質問紙調査	大学生 男女	幼少期の身 体接触
9	乳児の「抱っこ」に関する心理学的研究の展望	飯塚有紀	人間文化創生科 学論叢	研究報告 (8)	2010	文献レビュー	文献	抱っこ
10	タッチケア教室に参加した母親の育児意識に関連する要因	中村登志子・ 有吉浩美・ 洲崎好香他	日健医誌	原著 (8)	2011	育児意識 因子分析	母親	タッチケア
11	生後4か月児を持つ母親におけるタッチの養育場面の相違:母親の出産経験,授乳方法の違いに注目して	麻生典子・ 岩立志津夫	小児保健研究	原著 (9)	2011	タッチ評定尺 度	母親	養育場面での タッチ
12	タッチケアが産後1~2か月の母親の愛着・育児不安・母子相互作用の及ぼす影響	渡辺香織	母性衛生	原著 (8)	2013	質問紙調査お よびビデオ観 察	母親と 子ども	タッチケア
13	子ども時代の身体接触と大学生の対人関係との関連	藤田文	大分県立芸術文 化短期大学研究 紀要	論文 (13)	2013	質問紙調査 学生用ソー シャルサポ ート尺度 対人 スキル尺度	大学生 女性	子ども時代の 身体接触
14	早産児を持つ母親がわが子を抱いている時の思いと抱くことの意味	本田直子・ 杉本陽子・ 村端真由美	日本小児看護学 会誌	研究報告 (7)	2015	半構造化面接 KJ法	早産児 を持つ 母親	抱く

「冒険的対人アプローチ」（親密でない相手でも直接的な身体接触や自己開示をする）と「保守的対人アプローチ」（相手との関係がより親密になって初めて親密な身体接触と自己開示をする）があり、性による相違が認められた。このことから、身体接触は母親と子ども双方の親密度をはかり、自身と相手との相互的行為であるといえる。

次に、身体接触的遊びである「くすぐり遊び」とそれに伴う「くすぐったさ」について、根ヶ山ら（2005）は観察した結果を検討していた。母親がくすぐる時に、自分の身体感覚を下敷きにして、子どもの身体部位に応じた特定のくすぐり方を選び、またそのくすぐりによって子どもに多様な身体反応が生じ、それに呼応して母親がくすぐり方を変容させる。これは、母子間の身体的コミュニケーションであると結論づけている。このように、身体接触は母子間相互の作用を引き出し、呼応しあいながら関係性を発展させていくことがわかる。

## ② 親と子どもに対する相互の効果

身体接触の効果について「抱っこ」もしくは「抱きしめる」ことによる効果の研究がある。飯塚（2010）の文献レビューでは、乳児の「抱っこ」に関する心理学的研究を概観している。それによると、1960年代の研究では、「抱っこ」の左抱きか右抱きかの有意性について研究され、親側の要因を明らかにした。しかし、「抱っこ」の子ども側からの発達の変化であることが視野になかったため課題を残していた。近年の研究では、発達の変化に注目し子どもの「抱っこ」における役割を検討することによって、抱っこという一行為であっても母子関係を表しているという知見を得た。「抱っこ」の成立には親の要因だけでなく、子どもの要因も積極的に関与しているということである。「抱っこ」をケアとしてとらえ情緒的側面に向けた看護学の研究が行われるようになった。一般に「カンガルーケア」として研究され、愛着の形成、体重の増加、発達の促進といった医学的効果が実証されてきた。しかし、事例研究が多く実証的に研究したものが少ないと指摘されている。乳児の「抱っこ」に関する研究と今後の課題について、母親が「抱っこ」をどのように体験しているか丁寧に扱うことで「愛着」や「母性」の形成過程を直に取り扱うことになり、母子関係の形成過程と「抱っこ」の関連性を裏付けるという研究の課題が提示された。

今川ら（2008）の研究は、5歳児への身体接触の現状を調査し、子どもの行動に変化が認められるかの調査を行った。現状においては、父親が母親より世話行動は少なく、身体接触到性差が認められ、父親は少ない接触状況であった。同様に、今川ら（2009）が次に行った研究は、抱きしめることを実験的に繰り返すことによって、

子どもへの対児感情に変化があるのかということであった。その結果は、母親と日常的に抱きしめを行っていない父親の接近得点は上昇し、回避得点の低下がみられた。日常的に抱きしめていない父親が児を抱きしめるという行為は親子の心理的な距離を縮めたと推測している。以上の文献から身体接触である「抱っこ」「抱きしめる」行為は、親の子どもへの感情に対して影響を与えることが明らかにされた。

次に、「抱きしめる」という効果について竹澤ら（2007）は、保育士が積極的に園児を抱きしめることが、園児の協調性、落ち着き、不安に影響を与えるかどうかについて検討した。日本版 CBCL（Child Behavior Checklist）検査を用い判定した結果、協調性、落ち着きが増加し、不安の程度、座れなかった回数等で有意に減少し、保育士による抱きしめる行為の効果が認められた。身体接触の「抱きしめる」効果について、保護者でない場合でも、その効果を発揮できることが明らかになった。

## 2) 母子関係への影響

### ① 母子相互作用

わが子を抱いている時の思いを明らかにして、母親の主観から検討した研究がある。本田ら（2015）は、NICUに入院した早産児を持つ母親でわが子を抱いている思いについて、半構造的な面談を行い、母親の思いを抽出して得られた内容について KJ 法を用い分析した。母親は、五感でわが子を感じることによって子どもとの間に相互作用が生じ、母親としての始まりを実感していた。母親は、子どもの身体の小ささ、呼吸の荒さ、温もり、重みなど子どもが意図をしていないものもサインとして受けとり、安堵感や前向きな気持ちを感じていた。

次に、母児間のスキンシップ（身体接触）がもたらす影響について、坂口ら（2006）は、母と子のきずながどのように作られているか、その形成メカニズムを明らかにするために、母親に児を抱っこして見つめ、話しかけさせ、その生理・心理的影響について検討した。抱っこして「話しかける」ことにより CV<sub>R-R</sub> 値は安静時との比較で有意に低下した。実験中の児の CV<sub>R-R</sub> 値は、同様に母親から児へ「話しかける」ことによってコントロール群との比較で有意に上昇した。また、児を抱っこし「見つめ、話しかける」ことによる一連の母子間のスキンシップは母親に接近感情を誘導し、児には精神的安定をもたらしていた。以上から、母親が子どもを温もりや重みから、じかに体感したことにより子どもに対する受け入れや前向きな気持ちと接近感情を抱くことができたと考えられる。身体接触が皮膚と皮膚との触れ合いであることがもたらした効果といえる。また、皮膚と皮膚の接触と親密

なコミュニケーションが親子の親密な関係をもたらすことが明らかになった。身体接触だけでなく見つめあひながらのコミュニケーションが母親の子どもに対する肯定的な感情を引き出すことに有効であると結論づけることができる。

## ② タッチケアによる母親の感情の変化

以下の文献を採用した。

山本ら(2008)は、母親の対児感情が変容する過程に、新生児期の頃から母親が子どもにタッチケアを始めることが関与するというを明らかにした。新生児期の子どもに対してタッチケアを実施している母親と実施していない母親の児に対する感情について、対児感情尺度を用いて、変容過程を比較検討した結果、低体重児の母親、25歳未満、母乳栄養の頻度が少ない母親において接近感情の変化が大きいことが明らかになった。母子間の肌と肌の触れ合いが増したことから子どもを受容する感情が高まったと結論づけられた。タッチケアは単なる技術ではなく、育児支援の一つであり、子どもと肌の触れ合いを通して、良好な母子関係を築くものとして伝えていく意義が大きいと述べている。

次に、タッチケア教室に参加した母親の研究について、中村ら(2011)は、育児意識の因子分析の結果、「育児肯定感」「身体的効果」「反応の理解」「育児不安」因子を抽出している。この結果から、タッチケアを行っている母親の方が「身体的効果」因子に関連した肯定的な育児意識が高かった。「反応の理解」因子と「育児不安」因子に関連したのは、受講頻度であった。タッチケアを有効に活用することによって「身体的効果」が高まる可能性がある」と結論づけている。

麻生ら(2011)は、4か月児を持つ母親のタッチの養育場面の相違について研究している。母親のタッチが基本属性(年齢・出産経験・授乳方法)により相違があるか、また、母親のタッチの養育場面での相違が、出産経験と授乳方法の各群に共通に認められるかが検討され、タッチ評定尺度を用いた質問紙調査が実施されている。その結果、泣きや寝かしつけの場面の部分タッチと抱っこカテゴリーについては、初産婦が経産婦より多かった。授乳の部分タッチと抱っこカテゴリーでは、母乳群が混合群や人工群よりも多かった。また、母親のタッチは、出産経験と授乳方法が異なっても四つの養育場面(泣き・寝かしつけ・遊び・授乳)ごとに相違が認められた。この結果を、臨床場面に応用し、育児のスキルアッププログラムの開発が可能であると結論づけている。

渡辺(2013)の研究では、タッチケアが産後1～2か月の母親の愛着・育児不安・母子相互作用に及ぼす影響を、明らかにしている。介入前後の母親の愛着・育児不

安に関する質問紙調査とビデオ撮影による母子相互作用の観察が行われ、その結果、母親に継続したタッチケアによって母子相互作用の「社会情緒的発達の促進」「愛情に対する反応性」が有意に高まっていた。母親にタッチケアを「20日以上」または「10日以上」継続することで、育児不安が低減することが明らかになった。以上の文献から、母親の子どもに行うタッチケアの有用性と効果が明らかになり、今後、産後の早い時期、特に母子関係が形成される時期に、母親への育児支援の一つとして応用することが必要であると考えられる。

## ③ 幼児期の身体接触の重要性と影響

相越(2009)の研究は、身体接触を情緒的コミュニケーションとして相手との「心的距離」を埋めるものとしている。身体接触の効果は、元々持っている接触に対する肯定的な感情やそれまでの接触経験が大きく影響する。そこで、幼少期における両親からの身体接触と現在の愛着スタイルにどのような関連があるかを質問紙調査で検討した。また、愛着スタイルと現在の他者との身体接触経験、愛着スタイルと模擬カウンセリングでの身体接触、それぞれの関係を明らかにした。模擬カウンセリングの接触場面は「最初と最後に握手」「席、出口への案内の際の背中への接触」「肩もみ」の5つの接触場面を想定し、接触したとき感じる「快」「不快」を質問紙で回答を得るという方法であった。その結果、幼少期における両親からの身体接触に男女間及び母親か父親かによって差があった。男性は女性に比べて親との接触が少なく、男性、女性ともに父親からの接触量は少なかった。身体接触と現在の愛着スタイルの関連では、男性は関連性がなく、女性は母親と父親との接触量に関連があった。特に、両親の身体接触量と「安定・回避」に量と型との間に関連性がある相関がみられた。現在の接触に対する評価は男女とも、愛着スタイルの「安定・回避」に評価内容と型とに関連性がある相関が認められた。安定型は回避型よりも現在の身体接触量が多く、普段の生活における身体接触量と、カウンセリングにおける身体接触という実験での結果は、安定型が肯定的に評価していた。回避型は、カウンセラーから身体接触を受けると不安感・緊張感を表すセルフタッチや反復行動が目立った。回避型にとって、身体接触がネガティブな影響を与えたことが示唆された。

次に藤田(2013)の研究では、子ども時代に両親から受けた身体接触の量が青年期の対人コミュニケーションのあり方とどう関連するかが、親からのサポート感、友人からのサポート感、対人スキルとの関連で検討された。また、友人との身体接触における触れることと触られることとの関係が検討された。その結果、子ども時代の

両親からの身体接触は、大学生の親や友人からのサポート感、社会的スキル、日常の友人関係での身体接触と関連がみられることが明らかになった。また、友人との親密さを伴うコミュニケーションのあり方にも影響を与えていることが示唆された。現代の人間関係の希薄さの指摘とともに対面でのコミュニケーションにおける身体接触の役割を検討する必要があると結論づけられた。これらの文献から、両親からの身体接触の体験が現在の若者の対人関係のあり方や個人の持つ親密性に関連することが明確になった。若い母親へのタッチによる支援には、個人が受けた身体接触の体験を十分考慮して実施しなければならないことが示唆された。

### Ⅲ 考察

#### 1) 身体接触の意義と効果

川名(2008)によって、身体接触は母親と子どもの親密化を促進するうえで大きな役割を果たし、それは母親自身と相手との相互的行為であることが明らかになった。山口(2005)も、くすぐり遊びによってくすぐる側とくすぐられる側が、身体接触独特の相互性に浸されていると論じており、身体接触が触れるものと触れられるもの相互に作用していることがいえる。身体接触について、山口(2003)は、「働きかける主体としての相と働きかけられる対象としての相の二重の相がある」(p.16)とし、同時に触れることと、触れられることの間を体験し、そのことによって、自他の融合感覚が生まれると述べている。身体接触が、自分と他者を感じさせ、自分と自分以外の人間との関係を見つめることの始まりとなる。身体接触は、母親と子どもの関係において、母親と子どもとの相互作用を促進させる始まりとなることが考えられ、愛着関係に良い影響を与えるといえる。「抱っこ」と「抱きしめる」の研究で、飯塚(2010)は、「抱っこ」には「温もり」「やわらかさ」「重み」「手触り」といった情緒的な意味を持つ行動が乳児期の母と子どもの関係性の形成に大きく寄与していると述べている。今川(2008, 2009)の研究では、対児感情がどのようなメカニズムで変化したのかの検討がなされていないため、今後の研究が待たれるが、推察すると「抱っこ」そのものの情緒的な意味を持つ行動が日常的に身体接触を行っていない父親の対児感情を高めていたことにつながると考えられる。とすれば、日常的に身体接触を持たない母親であっても、子どもに対して「抱っこ」や「抱きしめる」行動を行うことによって、母子の愛着関係に関してよい影響を与えられることが推察される。竹澤(2007)の研究で保育士が「抱きしめる」行為を行い、その効果が認

められたが、それによって、養育者でない場合でも、信頼や親密な関係を持つのであれば、子どもが変容できることが明らかにされた。これは、先行研究を実証していることから意義深いものと考えられる。

茂木(2003)によって、母親から子への身体接触は年少期から年中中期の間に顕著に減少することがいわれている。母子の間で身体接触が少なくなった時期に、保育士が身体接触の効果を示すことができれば、保育園と自宅で身体接触を実施することができる。保育士と母親が連携をとり、双方による子どもへの身体接触の機会をより多く持つことによって、子どもの精神的な安定を図り、年少期における母親と子どもの関係をよりよいものにするという示唆が得られた。

今後の課題としては、身体接触やその方法としての「抱っこ」、「抱きしめる」について、親子の相互作用に着眼した効果についての研究が少ないことが挙げられる。子どもにとって一番近い存在である母親との身体接触の効果や身体接触の方法についてより一層研究を促進・充実する必要がある。

#### 2) 母子関係への影響

##### ① 母子相互作用

本田(2015)によれば、母親は、体感した温もりから子どもの生きる力や生命力を感じ、わが子としての存在を実感していた。この存在が母親の心を感じさせる「作用」となったと考えられる。母親は、子どもの命を守るために子どもを「抱く」。子どもは「抱きしめられることによって、自分がこの世界から望まれた存在であることを確認できる。そして人間やこの世界に対する根本的な信頼感といったものは、幼児期にふんだんに与えられるスキンシップによって育てられる」(Montague Francis Ashley-Montagu, 1977)のである。母親が子どもとどう関わるかによって、母子相互作用の質は大きく変わるといえる。そこで、身体接触を通して、母親の子どもへの肯定的な感情を引き出すことができれば、子どもとの相互作用によって、質の良い母子相互作用となることが考えられる。

##### ② タッチケアの母親への効果

山本ら(2008)、渡辺(2013)の研究では、新生児期や産後1～2か月の母親がタッチケアを自分の子どもに実施した結果、母親の子どもを受容する対児感情が高まり、子どもの「社会情緒的発達の促進」「養育者に対する反応性」が有意に高まっていた。これは、タッチケアが肌と肌の触れ合いであり、子ども自身を肌で実感し、母親が子どもを客観的でなく、主観的に捉えられた結果である。身体接触が愛着形成にとって重要である(山口, 2003)。

また、身体接触をすればいいという訳ではなく、乳児の起こす社会的相互作用に合わせて、タイミングよく調整することによって、子どもとの対話ができるといわれている (John Bowlby, 1988)。タッチケアは愛着を形成するための一つの方法であり、産後の早い時期から育児支援に活用することができれば、良好な母子関係を構築する一助となる可能性がある。中村ら (2011) は、タッチケア教室に参加した母親において肯定的な育児意識が高くなっていったという結果を得ている。タッチケア教室の今後の課題は、タッチケアの正しい理解を図ることと母親が継続して子どもへのタッチケアを行うことである。1歳を過ぎると子どもへのタッチケアは難しくなる。これは、母親の子育てにおける負担が大きいことから、余裕も時間も少なくなることが原因である。また、子どもは、活動範囲が広くなり、年齢も「いやいや期」へと向かう。そのため、母親は物理的にも、精神的にも負担が大きく、タッチケアを継続することが困難となる。そのような状況になる前にタッチケアの受講経験頻度の少ない母親への支援を実施することが重要である。

麻生ら (2011) はタッチ評定尺度を用い、日常的に用いるタッチが四つの養育場面ごとに相違があるかを検討している。母親のタッチは、乳児の養育場面に見合う形で応答的に提供されていた。日常的に母親が用いるタッチをどのように母親は子どもに提供しているかを知ることが重要である。現代の若者は、子どもとの身体接触の体験が少なく、子どもを苦手と思っていることもあり、自分の子育てに不安があると考えられる。その若い母親のために育児のスキルアッププログラムの開発がされれば、育児不安から虐待を起ささない対策となる可能性がある。この研究の意義は大きい。タッチが親子のきずなを深めることへの科学的な研究が広がりを見せているにもかかわらず、日常の母親が行うタッチに関する研究は少なく、今後、その領域においても、「日常のタッチ」について研究を進めていくべきである。

### ③ 幼児期の身体接触の重要性

相越 (2009) と藤田 (2013) の研究は、両親から幼児期に受けた身体接触が、現代の愛着スタイルや対人コミュニケーションに影響を与えていることを報告している。心地よい身体接触は、皮膚への刺激となって、脳の広い範囲を刺激しているといわれている (山口, 2013)。これらの研究の結果は、幼児期の身体接触の重要性を再確認させてくれるものであり、重要性への根拠ともなるものである。しかし、過去の記憶への想起となる可能性があるため、被試験者に対する倫理的配慮やその後のフォローに十分な配慮が必要となる。

アタッチメントとその後の発達において、1歳の時に

安定したアタッチメントを示した乳児たちは、不安定群の子どもに比べて発達した後の社会的行動が、協調的で、親和的で、ポジティブに反応することが多かったといわれている (依田, 1981)。反面、幼児期のスキンシップの接触量が他者と比べて不足している子どもは、高校になった時、衝撃的に他者を攻撃する傾向 (すぐキレルといわれている) があるという結果が明らかになっている (山口, 2000)。乳児期に両親 (あるいは養育者) からどのように扱われたのかが重要となってくる。乳児期に安定したアタッチメントを示すことができるように、皮膚感覚を通した、心地よい身体接触を受ける環境づくりが必要となる。また、社会生活上で必要な対人関係の要素である他者への思いやりは、知識や技術を使って持つことができるのではなく、他者を実感し、相手の温もりを感じることによって、他者を自分自身に引き寄せ、相手の生活、感じ方を自分に取り込まなければ、育てることができないといえる。そのため、子どもが体験する初めての他者との関わりとしての母子相互作用が豊かな関わりでなければならないのである。

そこで、今後の身体接触の研究は、①母子関係と子どもの発達に視点を置いた研究について、②子育て支援の中にどのように組み込むのかの研究について、③親子間での身体接触の進め方について進めていかなければならない。その際、母親の幼児期の身体接触体験について、十分な検討が必要となる。以上の研究は、今後の良好な母子関係の形成に重要なものとなる。

## IV 結論

- ① 身体接触は、対人関係における相互的行為である。
- ② 身体接触は、親と子どもの相互に効果があった。その効果は、対児感情を高め、不安を低下させ、親と子どもの相互のコミュニケーションという意味を持っていた。
- ③ 身体接触は、母親と児の母子相互作用を高め、安堵感や前向きな気持ちを抱くことができ、児には精神的安定をもたらした。
- ④ 母親が参加するタッチケア教室での体験は、母親に肯定的な育児意識を高めた。
- ⑤ 幼児期の身体接触の重要性とその効果について個人の要因に左右されることが示唆された。
- ⑥ 今後の身体接触の研究は、母子関係と子どもの発達に視点を置き、子育て支援や親子間の身体接触が課題となる。その際、母親の幼児期の身体接触体験について、十分な検討が必要となる。母親の身体接触体験が今後の良好な母子関係の形成に重要となる。

## 用語の定義

- 注：① スキンシップ（身体接触）：母親と子どもなどの肌の触れ合いによる親密な交流のこと（広辞苑）。また、触れる、なでる、抱く、揺するという方法がある。身体接触の特徴には働きかける対象としての相と働きかけられる対象としての相という二重の相がある。この特質から自他の融合感覚が生まれる（山口，2003）。
- ② タッチケア：1992年アメリカのマiami大学内に設置されたタッチリサーチ研究所にて乳児に対するタッチの方法をTiffany Fieldが中心となり、開発した方法である。NICUにおいて、新生児の皮膚を緩やかに看護師の手でなでる方法である。なでる部位は上下肢及び背部、腹部である。なでる方向は上下あるいは末梢から上部へ一方向とする。

## 引用・参考文献

- 相越麻里（2009）身体接触の臨床心理学的効果と青年期の愛着スタイルとの関連，岩手大学大学院人文社会科学研究科紀要，第18号，pp.1-18.
- 麻生典子・岩立志津夫（2011）生後4ヵ月児を持つ母親におけるタッチの養育場面の相違：母親の出産経験，授乳方法の違いに注目して，小児保健研究，第70巻，第4号，pp.506-514.
- Ashley, Montagu. (1985) 親と子のふれあいタッチング，佐藤信行・佐藤方代共訳 平凡社。（Ashley, Montagu. (1977) Touching: The Human Significance of the Skin.）
- 飯塚有紀（2010）乳児の「抱っこ」に関する心理学的研究の展望，人間文化創生科学論叢，第12巻，pp.183-190.
- John, Bowlby (2004) ボウルビー 母と子のアタッチメント心の安全基地 二木武監訳 医歯薬出版株式会社。（John, Bowlby. (1998) A Secure Base. Clinical applications of attachment theory.）
- 藤田文（2013）子ども時代の身体接触と大学生の対人関係との関連 大分県立芸術文化短期大学研究紀要，第50巻，pp.81-93.
- 本田直子・杉本陽子・村端真由美（2015）早産児をもつ母親がわが子を抱いている時の思いと抱くことの意味，日本小児看護学会誌，第24巻，第2号，pp.44-50.
- 今川真治・山元隆春・財満由美子（2008）「抱きしめる」ことが親のイメージに与える影響に関する研究（1），広島大学学

- 附属学校共同研究機構紀要，第37号3，pp.415-423.
- 今川真治・山元隆春・財満由美子（2009）「抱きしめる」ことが親のイメージに与える影響に関する研究（2），広島大学学学部・附属学校共同研究機構紀要，第37号3，pp.253-258.
- 川名好裕（2008）対人関係における身体接触の位置づけ，明治大学心理社会学研究，第3号，pp.59-66.
- 中村登志子・有吉浩美・洲崎好香ら（2011）タッチケア教室に参加した母親の育児意識に関連する要因，日健医誌，20(1)：pp.15-22.
- 根ヶ山光一・山口創（2005）母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達，小児保健研究，第64巻，第3号，pp.451-460.
- 西海真理（2001）早産児を出産した母親が児との関係を育むということ，日本新生児看護学会誌 Journal of Japan Academy of Neonatal, Vol 8, No 2, pp.23-35.
- 坂口けさみ・大平雅美・市川元基ら（2006）母子間スキンシップが母児相互に及ぼす生理・心理的影響，母性衛生，第47巻1号，pp.190-196.
- 竹澤博美・相守節子・牧野雅美ら（2007）「抱きしめる」という効果，新田塚医療福祉センター雑誌，Vol 4 No. 1, pp.17-18.
- 寺見陽子（2015）母親の育児ストレスの背景とソーシャルサポートに関する研究：母親の成育経験と子育て環境との関連，Journal of the Faculty of Human Sciences, Kobe Shoin Women's University：JOHS, 4, pp.59-73.
- Tiffany, Field. (2008) Touch 佐久間徹監訳 二弊社. (Tiffany, Field. (2001) Touch.)
- 徳永豊（2003）対人的相互交渉における身体接触の意義について「重度・重複障害児のコミュニケーション行動における共同注意の実験的研究」，科研報告書，pp.21-25.
- 渡辺香織（2013）タッチケアが産後1～2か月の母親の愛着・育児不安・母子相互作用の及ぼす影響，母性衛生，第54巻，1号，pp.61-68.
- 渡邊菜奈美（2011）「育児不安」の再検討－子ども虐待への示唆－，東京大学大学院教育学研究科紀要，第51巻，pp.191-202.
- 山口創（2003）愛撫・人の心に触れる力 日本放送出版協会〔刊〕
- 山口創（2013）子供の「脳」は肌にある 光文社新書
- 山口創（2006）「皮膚」と「心」の意外な関係 講談社ブルーブックス
- 山口創（2014）身体接触によるこころの癒し，全日本鍼灸学会雑誌，第64巻3号，pp.132-140.
- 山本正子・三巖真砂枝・山口創（2008）新生児期のタッチケアが母親の胎児感情に及ぼす要因，母性衛生，第49巻，2号，pp.261-266.



# A Literature Review of the Mother-Child Relationship : The Effects of Physical Contact to Influences

Satoko Kojima

*Osaka University of Comprehensive Children Education Graduate School*

## Abstract

With the objectives of elucidating the significance and effectiveness of physical contact and its effects on the mother-child relationship, and obtaining suggestions for future support for the mother-child relationship, we reviewed previous studies conducted during the past 10 years in Japan that were related to: 1) the significance and effectiveness of physical contact and 2) the effects of physical contact on the mother-child relationship. Regarding the significance and effectiveness of physical contact, physical contact was found to (1) be a mutual act in interpersonal relationships and (2) be mutually effective for the parent and the child. Physical contact was effective for promoting feelings toward the child and reducing anxiety, and served as a form of physical communication. As for effects on the mother-child relationship, the results indicated that: (1) physical contact promoted mother-child interactions and resulted in a sense of relief and positive feelings in which the child induced mental stability; (2) mothers' experiences of participating in physical contact classes promoted a positive impression of childrearing; and (3) the importance and effectiveness of physical contact during infancy are influenced by personal factors. Future research on physical contact must investigate childcare support and physical contact between parents and children from the viewpoints of the mother-child relationship and the child's development. It was found that when investigating these issues, it is necessary to sufficiently investigate the mother's own experiences of physical contact during infancy. The above points are important for formation of favorable mother-child relationships in the future.

**Key words** : touch, mother-child relationships, physical contact, development

